

## コメントA：花島健司（小学校の日本語教室から）

**花島** それぞれの先生方の御発表された内容が、私が実際に現場で子どもたちを教えている時に感じている問題と、重なっている部分が多いなと思いました。それぞれの場所や立場で先生方が、御苦労されていることや抱えている課題が、似通っているのではないかと改めて感じました。それぞれの御発表や私自身の実践などから、日頃感じている子どもが日本語を学んでいくときの特性についてお話しさせていただきたいと思います。

### 実際の活動や体験に基づいた学習

子どもが接している外国人児童生徒は、日々成長し、知的発達をしながら、日本語という新しいことばを、覚えていかなければならない状況にあります。そこで一人一人の子どもの認知能力のレベルが、どこまで発達しているかということを見極めて、適切な指導法を選択しないと、子どもは戸惑い、習得がうまくいかないのではないかと思います。この点が、大人が新しいことばを身につけていくのと、一番違う点ではないかと思います。足立さんの発表にありましたように、小中学校に在籍する外国人児童生徒の日本語の学習は、教科学習と切り離して考えることはできません。日本語の学習と、教科の内容の理解、それに子ども一人一人の認知能力の発達という三つの関わりが、現在の様々な課題を生み出しているように思います。小学校の場合は、特に低学年ほど第一言語で知識や概念が未だ完成されていないところで、第二言語である日本語で教科指導を行わなければならない現状です。その点で、ある程度、第一言語での知識や概念が形成された中学校で行うことができる加算的な二言語併用教育ができにくい状況にあります。そこでどうやって、子どもたちに指導をしていったら効果的なのかと、いろいろな道を探ってまいりました。その中で、第一言語で置き換えたり、理屈を説明してもわからないことばや事柄に関しては、案外日本の子どもたちが、新しいことばを学習していく方法と、かなり似通ったやり方ができるのではないかと感じております。それはやはり、実際の活動や体験に基づくことではないでしょうか。そして、その上に児童が習得している範囲のわかりやすい日本語で説明を加える。これが体験上、実用的で有効な方法でした。例えば、子どもが「ふわふわ」ということばが理解できない。このときに、実感できるような体験の場の設定することと、わかりやすいことばで説明する教師側の力を高めること。こういった工夫を現在実践しております。

### 学習の動機付けを高めるために

また次に、小学校の場合は、日本語の学習に対する動機づけが低いというのが、とても大きな問題です。どうして日本語を学習しなければならないのか、ということ納得して来日している子どもは多くありません。当然のことながら、年齢が低いほど少ないのが実態です。この点は柳澤さんの言語生活環境との適応に関わってくるのではないかと思います。私の学校でも、日本人児童との関わりの変化について感じていることと重なってきま

す。そこで、この学習の動機づけをどう高めるかですが、私は学習活動の工夫、これが非常に重要なのではないかと考えております。このことばを勉強しなければならない、このことばを使わなければならないという必然性を持たせた場面設定をすること。これが大切な足掛かりになるのではないのでしょうか。そして、達成感を感じさせることによって、学習に対する意欲を高めていくことも大切だと思います。覚えたことが、実際に必要とする場面で、使うことができること。クラスに戻って、先生の言っていることが理解できた、授業がわかった。そして、友達に対してことばで伝えることができた。授業中に発表して、周りから認められた。この喜びは、次の学習へと大きくつながっていきます。こうした体験ができるように、日本語の授業とクラスの授業との連携がうまく機能していくことが、今後ますます必要ではないかと考えております。

**吉野** ありがとうございます。それでは、続きまして埼玉県立和光国際高校の大堀先生、お願いいたします。